



● 障害学生支援に関する大学長連絡会議を開催

平成 21 年 1 月 28 日 水曜日、筑波技術大学におきまして、「障害学生支援に関する大学長連絡会議」が開催されました。障害学生の支援を積極的に進めている 11 大学から、学長（あるいは、副学長、理事）においでいただき、現状報告と今後についての意見交換が行われました。具体的な内容について述べる前に、なぜ『学長』なのかからお話しさせていただきます。

●なぜ、『学長』なのか

近年、障害学生支援に関連するセミナーや研究会は、年間にかなりの数が行われています。ほんの数年前までは考えられなかったことです。それだけ、それぞれの大学に障害学生が在籍するようになった、あるいは、障害学生が支援希望の声を上げるようになった、ということだと思えます。同時に、様々な障害学生の声に、十分な対応ができていない大学も少なくないことを示しているのではないのでしょうか。



開会の挨拶をする大沼 学長

さて、障害学生支援に関わる人として、次の方々が挙げられます。支援担当職員（支援に関わる様々な業務を行い、支援の窓口となる職員）、支援学生（障害学生支援の実質的担い手）、教員（日々の授業の担当者＝情報の発信者）です。しかし、この三者だけで、支援はできません。日々の生活で周りの学生が、窓口で支援担当以外の職員が、研究指導で教員が、それぞれ少しずつ障害学生を支援しないと、多様な側面を持つ大学生活を続けることはできません。

また、障害学生支援は、“講義保障”が中心と思われがちですが、例えば、重度の肢体不自由学生等では、食事の世話やトイレ介助も支援の範疇に入ってきます。それがないと講義そのものを受けられないからです。そうすると、もう、教務部長、教務課の所掌とは言いづらくなります。

このように、障害学生の支援とは、一担当者や一部の関係者だけが関わるのではなく、多少大袈裟に言えば、大学がその総力を持って、大学の責務として行うべきもので

す。このことから『学長』がクローズアップされてきます。トップの理解がなければ大学全体としてこの事業を進められないからです。

他方、支援には、支援担当者間、大学間の相互支援がどうしても必要となります。多様な障害、様々な障害の程度、これら全てに対して対応のノウハウを持っている大学はないからです。この“現場”の連携をスムーズにするためにも、トップの相互理解は必要です。

このようなことから、我が国 高等教育機関全体の支援への積極的な取組みと支援技術のレベルアップに向けて、この『大学長連絡会議』は、画期的な意義を持つものと考えています。

●発表と意見

会議には下表に示した方々にご出席いただきました。国立・私立、総合大学・単科大学など、規模も地域も異なる大学が、障害学生の修学支援というテーマ一点で、一つのテーブルに着くのは画期的（出席者の言）なことであり、第 1 回ホスト校として非常に名誉なことではありますが、様々な課題が予想されるこの領域において、そのかじ取りの難しさも、また感じました。

出席者	
大学名	出席者
札幌学院大学	布施 晶子 学長
宮城教育大学	高橋 孝助 学長
筑波大学	工藤 典雄 理事・副学長
東京学芸大学	鷲山 恭彦 学長
静岡福祉大学	加藤 一夫 学長
愛知教育大学	都築 繁幸 学長補佐
日本福祉大学	宮田 和明 学長
同志社大学	八田 英二 学長
関西学院大学	杉原 左右一 学長
四国学院大学	神野 明 副学長
福岡教育大学	二宮 憲一郎 理事・副学長
筑波技術大学	大沼 直紀 学長



会議の様子 1

会議は、大沼直紀 筑波技術大学長のスライドによる説明を交えた挨拶から始まり、同大学 石田久之 特命学長補佐による「我が国の障害学生支援の動向について」、東京学芸大学 濱田豊彦 准教授と 同志社大学 桂 良彦 学生支援課長による「大学における障害学生支援の取組状況について」の発表の後、意見交換となりました。

意見を整理すると以下の様になります。

- ・大都市と地方都市、あるいは大規模大学と小規模大学などの違いがある中で、同一の障害学生支援ポリシーを持つことが必要。
- ・支援の整備・充実を進める上で、財政面での問題の克服が必要。
- ・障害学生に対する一方的な支援ではなく、健常学生と障害学生が互いに支えあい、育ちあうことが必要であり、大学として双方にどうサポートしていくかを考えることが必要。
- ・本会議が、障害学生支援に関し、センター的な役割を担うことが可能か否かを検証することが必要。

●どこへ向かうのか

この『大学長連絡会義』は、今後継続して、毎年1回開催されることになりました。これは、一度集まり、何らかのアピールを出せば、障害学生の支援がスムーズに進む、とは考えていないことを意味しています。

拡大する支援内容や範囲などを考えると、現在積極的と言われている大学でも、不十分さや今後の大きな不安を抱えています。経費、人的・物的資源をどのように安定して確保していくかは、全ての大学での課題であり、それらの解決に向けて、継続的な相互協力体制が必要であるとの意思表示です。

二つ目に、入学、在学時の教育・学生生活、そして卒



会議の様子 2

業・就職までの全期間を通し、総合的に支援を継続することが必要であり、同時にそれは健常学生を含めた学びと成長への実践であるとの認識の共有です。

障害学生が、“入学できる”大学はたくさんありますが、十分な教育を受けられる大学は多くはなく(大沼学長挨拶)、社会自立を目指す取り組みは、始まったばかりです。障害学生支援が大学の責務の一つであると考え、“全て”の学生へのより良い教育・研究環境の整備と社会自立への支援を目指し、これに賛同する大学と共に障害学生支援に関する情報を共有し、連絡・調整する場に、この会議をしたいというのが、参加された皆様のお気持ちではなかったかと考えております。

個々の具体的な支援内容の充実と共に、支援に関する積極的な考え方を学内に根付かせることにも、お集まりいただいた皆様のお考えやご意見は、大きな影響力を持つものと思います。

特命学長補佐(SD 支援調整担当) 石田 久之

● 企業向け大学説明会を開催



全体説明会の様子

●開催の意義

聴覚障害系就職委員会主催による企業向け大学説明会が、10月29日 水曜日に開催されました。この説明会は、各企業等の人事担当者等に本学の教育と学生の状況を理解していただき聴覚障害学生の雇用に当たっての参考としていただくと同時に、人事担当者等の意見・要望等を伺い、本学の今後の教育及び就職指導の在り方を検討する際の指

針とすることを目的に、毎年度実施しているものです。今年度は4年制大学に移行して初めての開催となったため、99社133名(昨年度80社112名)と非常に多くの人事担当者等が参加し、第一期生の採用に向け大学側にとっても、又企業側にとっても非常に意義のある説明会となりました。

●説明会の状況

説明会は、全体説明会を中心に、授業見学、名刺・情報交換会及び施設見学が行われました。授業見学は、1時限目から3時限目の計31科目(産業情報学科22科目、総合デザイン学科9科目)が公開されましたが、1時限目開始時間の朝8時50分から来られた人事担当者もあり、実際の教育場面と教育内容等に大きな関心のあることが示されました。

施設見学は、産業技術学部の産業情報学科及び総合デザイン学科の校舎棟の講義室及び実習室等(情報システム実習室、電子応用実験室、マイクロコンピュータ実験室、CAD/CAM室(以上産業情報)、CG実験室・実習室(総合デザイン))と障害者高等教育研究支援センターの補聴相談室、感覚補償システム開発室(以上メディアセンター棟)、就職関係資料室・手話学習室及び個別コミュニケーション指導室(以上大学会館1階)が公開され、熱心に見学されていました。

全体説明会は、天久保キャンパス講堂で実施され、始めに大沼学長から挨拶があり、引き続き、北川産業技術学部長から産業技術学部の概略と就職状況等について説明があり、最後に、石原聴覚障害系就職委員長から聴覚障害者の雇用に際しての留意点等の説明がありました。全体説明会のなかでは、石原委員長が行なった聴覚障害者の音の聞こえ方のデモが聴覚障害を理解する上で大変に参考になったとの声が多く寄せられ非常に好評を博しました。

名刺・情報交換会は、午前(10時～12時)と午後(14時～16時)の2回に亘り、管理棟大会議室に8箇所(産業情報学科 情報科学系3コース、システム工学系の電子システムと環境・安全コースが各1ブース、設計加工及び機械の2コースが1ブース、総合デザイン学科の視覚伝達・生産・建築の各コースが各1ブース及び学科未定・相談コーナー)に懇談ブースを設け実施しました。企業の人事担当者がいくつものコースの就職委員及び学科教員との間を回りながら、大学初の卒業生の就職活動に向けお互いに有益な情報の交換を行う姿が見受けられました。また、相談コーナーでは、企業現場での聴覚障害者の雇用上の問題点の相談や雇用実績のない企業が初めて聴覚障害者を受け入れるにあたっての助言等も行われ、各懇談ブースの前には列ができ、非常に盛況な交換会となりました。今年度の特徴として、4年制大学の教育への期待が強く感じられ、さらに、今後、聴覚障害学生を受け入れたいとの意欲を示す企業がかなりあったことが印象に残りました。

なお、名刺・情報交換会の会場には、昨年度に続き、保健科学部の懇談ブースも設けられ、訪れた企業の人事担当者に、本学の視覚障害学生の説明と今後の雇用促進に向けた懇談を行うことができ、非常に有意義な場となりました。



情報交換会の様子

●最後に

聴覚障害系就職委員会では、説明会に参加された企業の人事担当者にアンケート調査を実施し、①期日・日程、②内容実施方法等、③本学の就職指導・支援体制・教育全般への意見の3項目について意見を聴取しました。37社から提出(回収率37.4%)があり、実施への御礼や人材輩出への期待があると同時に、午後の授業見学がしたいや、名刺・情報交換会場が狭いなどの実施方法等についての意見や、社会人としてのルールやマナー、さらに人間的な能力の向上を図ってほしい等の教育全般への指摘もありました。

今後、これらの指摘事項を活かし、学生の就職開拓に資するよりよい説明会の開催に向け、改善を図る予定です。

聴覚障害系支援課

● つくば市職員を対象としたユニバーサルデザイン研修 2008 を実施

さる平成20年9月25日と10月8日、「つくば市職員を対象としたユニバーサルデザイン研修 2008」が開催されました。この研修会は、本学とつくば市とが連携で進めるユニバーサルデザイン推進事業の一環で、つくば市職員のユニバーサルデザイン意識向上を目的とした研修です。

これまで、本学はつくば市と連携してユニバーサルデザイン推進事業を進めてきました。2004年度の「全国地方自治体のUD事業調査/つくば市民のUD意識調査」以降、2005年度には前年に実施した事前調査を踏まえて「つくば市ユニバーサルデザイン基本方針」を策定し冊子としてまとめ、翌2006年度には「つくば市ユニバーサルデザイン・パンフレット」の作成と「イベントのユニバーサルデザイン」としてイベント対応マニュアルや、まつりつくばUDマップの作成を行いました。昨2007年度は、つくば市職員にひろくユニバーサルデザインの基本理念を知ってもらうことを目的として、「つくば市職員を対象にしたユニバーサルデザイン研修」を開催、講演会と体験研修会に約120名のつくば市職員が参加しました。

本年度行われた「つくば市職員を対象にしたユニバーサルデザイン研修 2008」は、これらの継続的なユニバーサルデザイン推進事業の一環として、また、昨年行われた研修会の第2弾であり、体験研修会(9月25日)にはつくば市のあらゆる部局から職員60名が、講演会(10月8日)には、

つくば市職員のみではなく市民や公共交通機関、障害者福祉団体など、つくば市のユニバーサルデザイン推進を共に担うであろう諸団体も参加して開催されました。以下にその内容を紹介します。

●ユニバーサルデザイン体験研修会(9月25日)

研究交流センターとつくばセンター地区を会場として体験研修会を行いました。これは、疑似体験を通して障害のある人の特性の一部を理解し、さらに支援を実際に体験したり、まち歩きをしたりすることで、ユニバーサルデザインの実現に向けて考慮・実践すべき内容を知ることが目的としています。設定した体験研修は5講座で、本学学生とつくば市聴覚障害者協会の協力を得つつ、本学教員・スタッフ計30名が各講座の講師を担当しました。参加者60名は5グループに分かれ、ローテーションをしながら1日かけて5講座すべてを体験しました。以下は各講座の内容と様子の一部です。

●講座A：聴覚障害者とのコミュニケーション体験

この体験講座は、主に窓口業務などを想定した聴覚障害者への対応方法について知ることが目的とし、実際に聴覚障害者(本学学生とつくば市聴覚障害者協会員)と1対1で接し、さまざまな手段を模索・使用してコミュニケーションを行いました。また、手話通訳がある場合や筆談など異なる方法での対応を体験し、聴覚障害者と健聴者がコミュ



講座 A の様子

ニケーションする場合にどのような工夫や配慮が必要か、意見交換しました。話し方や筆談の見せ方などについて具体的なアドバイスを受けながら、対応のコツを得ている様子でした。

●講座 B：聴覚障害疑似体験による窓口体験



講座 B の様子

この講座では、マルチトーカーノイズを聞くという方法で聴覚障害を擬似的に体験しながらコミュニケーションを行い、「聞こえにくいということ」の実感から、日常の業務ではどのように対応すればよいかを考えることを目的としました。また、講師による文字通訳も体験してもらいました。筆談の際の具体的な工夫を学びながら、活発な意見交換を行いました。

●講座 C：視覚障害者への窓口対応体験と視覚障害疑似体験による窓口申請体験



講座 C の様子

この講座では、視覚障害には様々な見え方があることを弱視疑似体験を通して理解し、対応方法の工夫について考えることを目的としました。疑似体験ゴーグルを装着して

の申請書類への記入と、窓口対応として申請のサポートの両方を体験してもらい、講師からはペン先の誘導方法などの具体的サポート方法のアドバイスと支援ツールの紹介を行いました。体験後の意見交換では、書類の字や記入欄を大きくしたいという改善案など積極的意見が出されていました。

●講座 D：視覚障害歩行体験（誘導ブロック体験）と“まちなか”の視覚障害者支援設備見学解説



講座 D の様子

この講座では、アイマスクをして全盲疑似体験をし、点字ブロックや白杖（はくじょう）を使って歩行してみるとともに、簡単な誘導方法としてはいけない誘導方法などの解説を行いました。また音声誘導による視覚障害者支援設備：ネオジシートを実際に見学しました。全盲の視覚障害者の移動における困難さの一部を実感を持って認識してもらえた一方で、点字誘導ブロックを積極的に手で触る参加者が見られるなど、触覚情報への意欲的なアプローチがみられ、この講座を通しての大きな変化に講師側が驚かされる思いでした。

●講座 E：高齢者、妊婦、車いすの疑似体験によるまちなか歩行体験



講座 E の様子

この講座では、実際に車いすに乗って歩行したり、シミュレーターを使用して高齢者、妊婦さんを疑似体験したりすることでそれぞれの移動の困難さを知るとともに、歩きなれたつくばセンター地区を実際に歩き、普段気にすることが無かったバリアや経路選択の不公平さについて考えるきっかけにしてもらうことを目的としました。参加者からは「外部空間にはほとんど水平の場所がないことに初めて気づいた」という意見が出されるなど、普段の歩行では気付かなかった困難さに多くの気づきを得てくれた様子でした。

1日に5つもの体験講座を受けるというハードな内容にも関わらず、講座を重ねるごとに障害者に対する理解が徐々に深まり、恐る恐るだった対応に余裕と工夫が見られるようになるなど、大きな意義と成果のあった研修会になりました。疲れの中にも充実感が漂う表情で帰路に就くつくば市職員の様子が非常に印象的でした。

●ユニバーサルデザイン講演会(10月8日)



講演中の関根氏(左)と島田氏(右)

今回の講演会では、体験研修参加のつくば市職員だけではなく、つくば市周辺の交通機関や福祉関連団体のほか市民にも公開され、多くの参加がありました。

共同主催である本学大沼学長と岡田つくば市副市長の挨拶の後、ユニバーサルデザインの普及推進のために広く活躍されている関根千佳氏(株ディット)と、行政機関として先進的な取り組みをしている熊本県から島田政次氏にご講演いただきました。

「今、なぜユニバーサルデザインが必要か」と題した関根氏の講演では、多くの障害者が活躍する自身の会社を例にあげながら、障害者の理解と参加機会の拡大というユニ

バーサルデザインの基本概念をご説明いただきました。島田氏からは「熊本県内におけるウェブアクセシビリティ普及の取り組み」と題して熊本県におけるユニバーサルデザインの実践例を解説に加え、行政が積極的にユニバーサルデザインを推進していく意義と必要性についても御説明いただきました。参加者は熱心に聞き入り、時折メモを取るなどしながら吸収しようとする姿が多くみられました。

また、これらの講演後、つくば市長公室から本研修の成果と総括として参加職員に行なったアンケート調査結果が示され、講座内容に高い満足感を得られたことや、ユニバーサルデザインへの意識が向上した、といった成果と本研修会の意義が述べられました。

つくば市職員のこれらの変化が広く市民にも示された訳ですから、今後は、実践に変えてゆくことが強く求められると思います。本学もまた、つくば市職員の意識向上だけでなく、ユニバーサルデザイン推進への具体的貢献をより大きく期待されることと思います。

本研修は、つくば市職員全員に参加してもらうことを念頭に置いている、全国的に見ても例のない試みです。しかし、さまざまな部局、業務を超えてユニバーサルデザインへの共通理解を得られた時、つくば市は人にやさしい街へ大きく加速することが期待されます。今年度で2年目となる体験研修会は、その意味でまだ入り口に立ったところといえます。今後継続して回を重ねていき、本学の特色を生かしながら、また変化してゆくつくば市民のニーズに応えながら、つくば市のユニバーサルデザイン推進事業を発展させていきたいと思っています。

筑波技術大学 学術・社会貢献推進委員会

産業技術学部 総合デザイン学科 准教授 山脇 博紀

●聴覚障害者のための遠隔 PC 要約筆記用ソフトウェア UDPCConnector の開発と無償配布

●はじめに

「遠隔 PC 要約筆記用ソフトウェア UDPCConnector」とは、教室の音声と映像をインターネット経由で遠隔地にいる字幕作成グループ(パソコン要約筆記団体)に送り、そこで字幕化されたデータを元の教室の聴覚障害者に提示する Windows 上で稼動するソフトウェアです。

従来、パソコン要約筆記者を聴覚障害者のいる教室に派遣し字幕を提示しているところを、本システムによって、遠隔地からの支援も可能となります。このシステムの活用によって、聴覚障害者に対する遠隔支援を低負担で実現でき、かつ、高度なスキルを有する人材を有効に活用できるようにもなります。

全国の大学および短期大学には、およそ 1,300 名の聴覚障害学生が学んでいます。聴覚障害者の社会進出が進んだことや、一般大学による聴覚障害学生の受入数の増加により、より専門性の高い教育を受ける聴覚障害学生も増えています。また一般大学では聴覚障害学生が 1 校に 1 名ないし 2 名という場合が数多く見受けられ、多くの教育機関に分散して在学しているのが現状です。

聴覚障害者が講義を受ける場合、講師から重要な講義内容を聞き取ることができないため、他の学生に比べて不利益を被ります。一般に、この不利益を無くすためには、講義と平行して手話通訳や文字による支援(情報保障)が実施されなければなりません。文字による情報保障には、授業中に発せられた講師等の音声情報を要約して聴覚障害者に提示するパソコン要約筆記という手法が使われるのが一般的です。

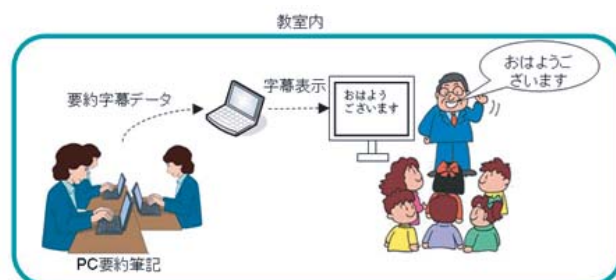


図1 通常のPC要約筆記による情報保障

パソコン要約筆記では、通常、講義1回に対して3人程度の要約筆記者が教室に派遣され、“教室内”で要約文作成のための連携作業を実施します。要約筆記者は、教室内に各担当者が持ち込んだノートパソコンを使い、要約文章をリアルタイムに入力します。各パソコンは、HUBを介してローカル接続されており、複数の要約筆記者が連携して要約文を作成し、それがHUBに接続された表示用パソコンに表示されることによって聴覚障害者に提示されます。

ところで、地域によっては人材の確保や、高度なスキルを持ったパソコン要約筆記者の確保には現在のところ困難を伴うことが少なくありません。今回開発したソフトウェアでは、この問題を解決するために、インターネットを活用しています。インターネットを通して、教室の音声や映像を遠隔地にいる要約筆記者のもとに配信し、そこで字幕化されたデータを再びインターネットを通して、教室のパソコンに戻す仕組みになっています(図2参照)。

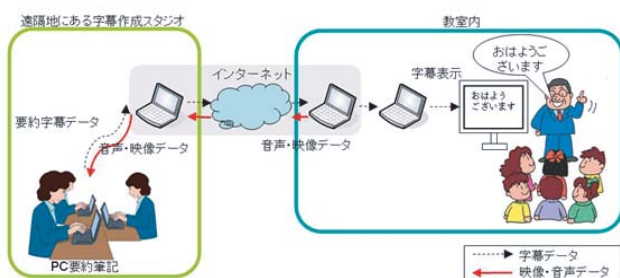


図2 本システムに接続したPC要約筆記による遠隔情報保障

このような仕組みを持つ本システムの利用によって、主に都市部に集中するPC要約筆記団体等が、情報保障手段を確保が困難な地域にある学校への遠隔支援を実施することが可能になります。また、専門性の高い講義に対しては、その分野の予備知識や高いスキルや経験が必要となります。そのような人材をシェアするためにも本システムは有用です。

一方、複数のキャンパスを有する大学では、育てた要約筆記者の多くが特定のキャンパスに在籍しているケースもあります。そうした場合でも、他のキャンパスへの支援を実施することが可能となり、貴重な人材の活用ができるようになります。

筑波技術大学では、聴覚障害者に対する情報保障に関す



UDPConnectorを利用して東京から
本学(つくば市)の講義保障を実施している様子

る研究活動を組織的に実施しており、今回、この研究過程で開発したソフトウェアを営利、非営利を問わず聴覚障害者支援を行なっている団体に対して無償配布を行うことにしました。

今後、マニュアルの整備等を進め、システム全体の構築が円滑に進むようPEPNet-Japan⁽¹⁾およびT-TAC⁽²⁾を通して事業を進めてゆく予定です。

- *1 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワークの英字表記略称で、聴覚障害学生の受け入れを先導的に行い、または指導や支援方法の研究を行なってきた大学や研究機関のネットワークです。本部は筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター障害者支援研究部(聴覚障害系)に在ります。
- *2 筑波聴覚障害学生高等教育テクニカルアシスタントセンターの英字表記略称で、本学が平成19年度から文部科学省の予算を得て、本学以外の聴覚障害学生が在籍する大学等へ、総合的な相談と支援を行なっています。

なお、ソフトウェアUDPConnectorの使用には、Adobe社製のFlash Media Interactive Serverという有料のサーバ・ソフトウェアとグローバルIPアドレスを付与したサーバPCが必要となります。現在、無料で利用可能なサーバ・ソフトウェアへの対応を目指し、開発を進めています。

障害者高等教育研究支援センター 准教授 三好 茂樹

● 二科展デザイン部等で総合デザイン学科学生が多数受賞

● 健常者と伍して、デザイン力を競うため

— 二科展デザイン部門へ毎年挑戦 —

視覚伝達デザインは、聴覚に障害がありデザインを職業として社会自立を目指す学生にとって、期待できる領域です。こうした考えに基づき、その能力を実践の場で磨くため、総合デザイン学科では、授業及び課外教育の一環として、2000年度より二科展デザイン部門へ毎年応募してきました。以後順次、二科大阪展「ポストカードデザイン大賞」、二科茨城支部展デザインの部にも授業等の成果物としての作品を応募し続けてきました。

二科会デザイン部代表・今村昭秀先生の「聴覚に障害の

ある学生さんの作品であることは伺っていましたが、当然のことですが、審査では、そうしたことへの配慮はされません」とのお言葉が示すように、まさに、健常者と伍してのデザインへの挑戦です。

そして、授業の殻を破って、デザインの現場・二科展に果敢に挑戦し、ものづくりの楽しさと厳しさを学んだ卒業生たちは、今、デザインの現場でまさに活躍中です。

ここ数年、学生側から「二科展に応募したいんですが…」と、積極的に参加してくる傾向が強くなってきました。この学生たちのものづくりへのモチベーションの受け皿の一つとして、二科展デザイン部等への応募の試みは、今後と

も地道に続けていきたい…「継続こそ力」です。

本年度の受賞実績は下記のとおりで、2000年度より9年間連続の受賞となりました。

●二科茨城支部展デザインの部 水戸市・県民文化センターで展示
2008年 第46回二科茨城支部デザインの部募集作品テーマは、A部門(自由テーマ)・B部門(イラストレーション)でした。2年次生及び3年次生が応募し、A部門で奨励賞1名、新人賞1名、入選3名、B部門で茨城新聞社賞1名の受賞がありました。

作品①



作品②



作品③



作品④



作品⑤



作品⑥



作品⑦



作品① 佐原 実歌

(B部門 茨城新聞社賞)・タイトル:「静寂の羊」

作品② 望月 悠加

(A部門 奨励賞)・タイトル:「美発生」

作品③ 笹川 菜摘

(A部門 新人賞)・タイトル:「空泳魚」

作品④ 佐藤 季司

(A部門 入選)・タイトル:「Travel in silence」

作品⑤ 古田 尚也

(A部門 入選)・タイトル:「Ruin's Infant」

作品⑥ 山本 侑季

(A部門 入選)・タイトル:「地球に自然を」

作品⑦ 楊 潔

(A部門 入選)・タイトル:「守る」

●二科展デザイン部

東京・六本木の国立新美術館で展示

2008年 第93回二科展デザイン部募集作品テーマは、A部門(自由テーマ・ポスター)・B部門(自由テーマ・イラスト)・C部門(特別テーマ「『地球温暖化防止』をテーマとしたポスター」)・D部門(マルチグラフィック)でした。

2年次生2名がA部門に、3年次生6名がC部門に応募し、2名が入選、6名が準入選しました。

作品⑧



作品⑨



作品⑩



作品⑪



作品⑬



作品⑫



作品⑭



作品⑮



作品⑧ 佐藤 季司

(C部門 入選)・タイトル:「命の芽」

作品⑨ 望月 悠加

(C部門 入選)・タイトル:「都会の大発生」

作品⑩ 笹川 菜摘

(A部門 準入選)・タイトル:「空泳魚」

作品⑪ 佐藤 季司

(A部門 準入選)・タイトル:「沈黙の放浪者」

作品⑫ 佐原 実歌

(A部門 準入選)・タイトル:「静寂の羊」

作品⑬ 古田 尚也

(A部門 準入選)・タイトル:「廃墟の幼生」

作品⑭ 笹川 菜摘

(C部門 準入選)・タイトル:「ここに、いたい」

作品⑮ 諏訪 恭子 (C部門 準入選)

・タイトル:「あっ もう時間の余裕はない!」

●二科大阪展「ポストカードデザイン大賞」大阪市立美術館で展示
テーマは自由で、3年次生4名が入選しました。

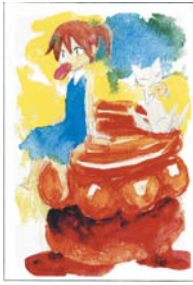
作品⑯



作品⑰



作品⑮



作品⑯



作品⑮ 諏訪 恭子 (入選) テーマ: 「ドーナツ」

作品⑯ 望月 悠加 (入選) テーマ: 「『ナマケモノ』 じゃなく『ハタラクモノ』」

〈二科展デザイン部等応募作品の指導教員〉

総合デザイン学科 安田 輝男／生田目 美紀／井上 征矢
※二科茨城支部展デザインの部応募作品と二科展デザイン部応募作品に同一作者の類似作品がありますが、これは、支部展応募作品にアドバイスを頂き、二科本展に応募している為です。

作品⑰ 笹川 菜摘 (入選) テーマ: 「Opponent of zipper」

作品⑱ 佐藤 季司 (入選) テーマ: 「A magician」

産業技術学部 総合デザイン学科 教授 安田 輝男

お知らせ

平成 21 年度教員免許状更新講習について

平成 21 年 4 月から教員免許状更新制が導入されます。

本学は、昨年実施した予備講習の経験を基に、平成 21 年度に聴覚障害児の特別支援教育に携っている先生、視覚特別支援学校自立教科(理療)を担当されている先生を対象者として 2 講座の教員免許状更新講習(選択)を開講します。

現在、文部科学省に開設認定について申請中ですが、その申請中の講習名、開設時期、受講対象者等の概要は次のとおりです。

なお、詳細な募集については、文部科学省から正式に開設認定を受けた後、4 月に本学ホームページ上で募集要項を公表する予定です。

【聴覚特別支援学校及び難聴学級における教育】

○講習概要

聴覚障害教育の現状と課題、言語及び教科指導法、聴覚活用、教材作成のための機器の活用、通常の学校で学ぶ聴覚障害児童生徒への支援等をテーマとする講義及び実習、わが国及び諸外国の最近の研究に関する情報の紹介等を行い、聴覚障害教育に対する理解を深め、専門性の向上を図ることを目的として開講します。

○開 講 日: 平成 21 年 7 月 25 日(土)
～ 27 日(月) 18 時間 + 試験

○募集人員: 30 名(聴覚特別支援学校、通級指導教室、難聴学級の教員)

○講習会場: 筑波技術大学天久保キャンパス

○受講申込: 平成 21 年 6 月 1 日(月)～ 12 日(金)

○受 講 料: 21,000 円(テキスト代 3,000 円を含む)

【鍼灸に関連する医学及び鍼灸の基礎・臨床実践講座】

○講習概要

視覚特別支援学校の自立教科(理療)担当教員を対象として基礎・臨床医学及び鍼灸理論と鍼灸臨床を、また、最近の臨床医学トピックスや内外の理療研究の紹介、経穴解剖学・生理学実験・手指衛生・触診などを講義と実習で学びます。理療科教員が理療科教育に対する理解を深め、専門性の向上を図ることを目的として開講します。

○開 講 日: 平成 21 年 8 月 17 日(月)
～ 19 日(水) 18 時間 + 試験

○募集人員: 20 名(視覚特別支援学校自立教科(理療)担当教員)

○講習会場: 筑波技術大学春日キャンパス

○受講申込: 平成 21 年 5 月 11 日(月)～ 29 日(金)

○受 講 料: 25,000 円(7,000 円の実験材料費を含む)

本学は、聴覚障害者及び視覚障害者を入学対象とする唯一の高等教育機関であり、障害がある受講者に対しても十分な情報保障を行うためのノウハウと実績を持っています。講師は、教科に対する専門知識の他に手話や点字・触図等に関する情報保障技術を習得しています。講習の実施に当たっては、受講する先生方の情報保障にも配慮します。

【問合せ先】 国立大学法人 筑波技術大学 〒305-8520 茨城県つくば市天久保 4-3-15
TEL 029-858-9421 (総務課教員免許状更新講習担当)